

## 何を子や孫に遺すか

〔聖書〕詩編78編1～8節

わたしの民よ、わたしの教えを聞き、わたしの口の言葉に耳を傾けよ。わたしは口を開いて箴言を、いにしえからの言い伝えを告げよう。わたしたちが聞いて悟ったこと、先祖がわたしたちに語り伝えたことを。子孫に隠さず、後の世代に語り継ごう。主への賛美、主の御力を、主が成し遂げられた驚くべき御業を。

主はヤコブの中に定めを与え、イスラエルの中に教えを置き、それを子孫に示すように、わたしたちの先祖に命じられた。子らが生まれ、後の世代が興るとき、彼らもそれを知り、その子らに語り継がなければならない。子らが神に信頼をおき、神の御業を決して忘れず、その戒めを守るために先祖のように、頑な反抗の世代とならないように、心が確かに定まらない世代、神に不忠実な霊の世代とならないように。

### 〔序〕主の教え昼も夜も口ずさむ人

先日朝のNHKTVで、「どんな葬式をするか」が取り上げられていました。定年後程なくして亡くなった夫を家族葬で見送った奥さんに対して、夫の兄弟が「葬式の花輪の数が男の勲章なんだ。どうして仕事関係にも通知しないのか」と激しく怒る場面がありました。葬儀にどれほどの参列者が来てくださったか、花輪が幾つ備えられたかを見ることによって、故人の生涯が有意義だったのだと慰められるのですね。

昨年9月の関西連合信徒大会で、諸教会を永年にわたって支えてこられた信者さんの出席が多かったので、私は話の最後をこんな言葉で締めくくりました。「我が子に教育を授け、独り立ちさせたら、親としての責任を一応果たしたことになるでしょう。ですから皆さんが死ぬ時には、ご自分がその生涯で授かった財産を教会にそっくり献げて下さい。そしたら愛する教会は、神さまのご栄光を表すために貴い献げ物をどのように有益に用いるかを、真剣に祈るでしょう。そして新しい働きが生まれてくると信じます」。後で年配の方々から「心動かされました」という言葉をいただきました。

7月から詩編を読んできています。150編ある詩編の冒頭の第一編は「いかに幸いなことか」(アシュレー)という言葉で始まりました。どのような人が幸いな人なのでしょう。神さまの教えを無視せず、神さまに逆らわず、悪を行う協議に加わらない人です(1節)。ではどうしたら、悪の道に転落しないですむのでしょうか。「主の教えを愛し、その教えを昼も夜も口ずさむ」ことです(2節)。

申命記6章6節以下にこう記されています。「今日わたしが命じるこれらの言葉を心に留め、子供たちに繰り返し教え、家に座しているときも道を歩くときも、寝ているときも起きているときも、これを語り聞かせなさい。更に、これをするしとして自分の手に結び、覚えとして額に付け、あなたの家の戸口の柱にも門にも書き記しなさい。」

イスラエルの人たちは、主の教えを子供の時から繰り返し教えられ、座っている時も、歩いている時も、寝ている時も、起きている時も、常住坐臥、親から語り聞かされて、育つのです。「主の教えを愛し、その教えを昼も夜も口ずさむ人」。起きている時も寝ている時も、親から繰り返し語り聞かされて育ったから、主の言葉が自然に口に出てくるのです。

1985年にイスラエルを旅行した時、テルアビブの博物館で旧約聖書エステル記を細かく刺繍した様々な布の展示を見ました。ユダヤの家庭では子供が誕生する時、その家の女の子たちが、赤ちゃんへのお祝いとしてお母さんに手伝ってもらいながら一生懸命に刺繍して用意するのだそうです。家々でデザインが違いました。子供は産まれた時から聖書の言葉にくるまって育つ伝統が生み出した刺繍なのでした。

### [1]後世に語り継ぐべきこと

さて今日の詩編 78 編では、先祖から語り伝えられた神さまの教え、言い伝えを後の世代に隠さず語り継いでいくことの大切さが歌われています。

「わたしの民よ、わたしの教えを聞き、わたしの口の言葉に耳を傾けよ」(1節)。耳を傾けて聞かなければならないこととは何でしょうか。「わたしは口を開いて箴言を、いにしえからの言い伝えを告げよう」。昔から言い伝えられてきた箴言——神さまのいましめの言葉です。それらは先祖が彼らに語り伝えたものです。その箴言、言い伝えを、彼らも、後の世代に隠さず語り継ごうという呼びかけで始まります。

そして9節から 72 節の終わりまで、先祖がエジプトを出て荒れ野を旅し、約束の地カナンに定着して、やがて羊飼いだビデが王として選ばれるまでの歴史が、詩の言葉で歌われています。でもよくお読みください。それは神さまの恵みに対するイスラエルの民の、不平・不満・背きの繰り返しの歴史でした。

17節「彼らは重ねて罪を犯し、砂漠でいと高き方に反抗した」。32節「それにもかかわらず、彼らはなお罪を犯し、驚くべき御業を信じなかった」。そしてその極みは「神が彼らを殺そうとされると、彼らは神に求め、立ち帰って、神を捜し求めた。神は岩、いと高き神は贖い主と唱えながらも、その口をもって神を侮り、舌をもって神を欺いた」(34～36 節)という告白で、悔い改めたといっても口先だけの欺きに過ぎなかったと言っているのです。

ですからここで呼びかけられている後の世代に語り継ぐこととは、先祖たちの人生の勳章を現わす花輪を数え上げるのではなく、自分たちが受継いできた民族の歴史が人間の底知れぬ罪深さを教えているということだったのでした。

またそれと同時に「それでもなお、神は上から雲に命じ、天の扉を開き、彼らの上にマナをふらせ、食べさせてくださった」(23 節)、「しかし、神は憐れみ深く、罪を贖われる。彼らを滅ぼすことなく、繰

り返し怒りを静め、憤りを尽くされることはなかった」(38 節)、「神はご自分の民を羊のように導き出し、荒れ野で家畜の群れのように導かれた」(52 節)と、神さまの底知れぬ愛も歌われています。

2節に「わたしは口を開いて箴言を、いにしえからの言い伝えを告げよう」とありますが、言い伝えという訳語は口語訳や新改訳ではなぞと訳されています。「仏の顔も三度」という諺もあるように、幾度も騙されたら仏さまでも許さないというのが、世の常識です。滅ぼされて当然のイスラエルに対する神さまの憐れみと救いの歴史は、まさに なぞ としか言いようのないのもであったのです。

## [2] 朝鮮半島植民地支配を直視する

今日は8月29日です。百年前の今日、日本は朝鮮半島の大韓帝国を併合して植民地支配を始めたのでした。植民地支配は日本が無条件降伏した1945年8月15年に終わったのですが、菅首相は8月10日に首相談話を発表しました。私たちが心に深く留めるために、談話の冒頭部分を読み返してみましよう。

「本年は日韓関係にとって大きな節目の年です。ちょうど百年前の8月、日韓併合条約が締結され、以後36年に及ぶ植民地支配が始まりました。3.1独立運動などの激しい抵抗にも示されたとおり、政治的・軍事的背景の下、当時の韓国の人々は、その意に反して行なわれた植民地支配によって、国と文化を奪われ、民族の誇りを深く傷付けられました。

私は、歴史に対して誠実に向き合いたいと思います。歴史の事実を直視する勇気とそれを受け止める謙虚さを持ち、自らの過ちを省みることに率直でありたいと思います。痛みを与えた側は忘れやすく、与えられた側はそれを容易に忘れることが出来ないものです。この植民地支配がもたらした多大な損害と苦痛にたいし、ここに改めて痛切な反省と心からのお詫びの気持ちを表明いたします。」

日本国内には、このような歴史認識を持たない人が大勢います。当時の大韓帝国が内部に大きな腐敗と混乱を抱えていて、早晩瓦解する状態だったこと、清国・ロシア・日本の周辺国のどこと併合するか、中国やロシアに併合されるより日本との併合は最良の選択肢だったのだ。日本は他国の植民地支配とは異なり、韓国の近代化と民生の向上に大いに貢献したという歴史認識が根強くあります。ですから菅談話に対しても、元総理大臣はじめ多くの批判が投げかけられました。

しかし百歩譲って、日本が如何に良い政治を行なったとしても、植民地支配そのものが、人間の不平等を基本的な前提としています。支配する者とされる者とは決して平等ではありません。不平等な関係が、強い・弱い、優れている・劣っている、貴い・卑しいという差別感情を生じさせます。そして支配者は無意識のうちにも、その国の文化を奪い、民族の誇りを傷つけてしまうのです。

人々の朝鮮名を日本名に変えさせる。日本語の使用を求める。伊勢神宮の分社の朝鮮神宮を建てて参拝を求める。日本人にとっては日本国内と同じになることだ、その方は都合がいいだろうと

考えます。しかしそれが歴史と文化を否定することであり、民族の誇りを深く傷つけることだったので。日本人の間に韓国・朝鮮の方々に対する差別意識が、今日もなお根深くあること自体、植民地支配の間違いを示しています。

私は先週、在日二世姜尚中さんの本「母オモニ」と「在日」の二冊を読みました。「何でや、何で朝鮮人はこがんな目に遭わんといかんとか。国は解放されたのに、何でこがんな惨めなままでおらんといかんとか」と叫ぶオモニ。「在日であること自体が犯罪的であるような、目に見えない雰囲気」が社会に充満していた。ともすると不安にかられやすい精神的脆弱さ。他者の眼差しに過敏になりやすい心性。世界で一番好きな国日本・同時に一番嫌いな日本・その両方が自分の中にある分裂した感覚」。このような言葉が至る所に、記されていました。私は在日の方々のこのような心情に、全く無知のまままで今日まで生きてきた自分が、恥ずかしくなりました。

菅首相は「歴史に対して誠実に向き合いたいと思います。歴史の事実を直視する勇気とそれを受け止める謙虚さを持ち、自らの過ちを省みることに率直でありたいと思います」と言っています。自分の犯した過ちを直視して認めるには、勇気と謙虚さが必要なのです。

イスラエルの人たちは、先祖が繰り返し犯した神さまに対する罪を直視して、隠さずに子や孫に語り継ぐと歌いました。矢張りイスラエルの民は偉いですね。歴史に何を見るか。何を学ぶか。花輪や勲章ではなくて、自分たちの犯した罪を直視する勇気と謙虚さが必要です。私たちは8月29日にこの詩編78と向き合いました。これは神さまの摂理ではないでしょうか。そして改めて韓国・朝鮮人の皆さんに、私たちの犯した罪の数々を、心からお詫び申し上げます。

### 【結】 子や孫に信仰を遺す

「しかし、神は憐れみ深く、罪を贖われる。彼らを滅ぼすことなく、繰り返し怒りを静め、憤りを尽くされることはなかった」。滅ぼされて当然のイスラエルに対する神さまの憐れみと救いの歴史は、まさになぞとしか言いようのないのもでした。

神さまは、この詩が歌われて 1000 年後に、私たちの罪を贖うために御子イエス・キリストをこの世に送られました。御子は人々の底知れぬ罪ふかさ、不信仰によって十字架に付けられながら、「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです」(ルカ 23:34)と祈りつつ死んで下さいました。神さまは御子を十字架で死なせて、私たち全ての者の罪を決定的に贖って下さいました。なぞであった神さまの底知れぬ愛が、キリストの十字架の福音として、明確にされたのです。

昔詩編 78 の作者が歌いました。「子孫に隠さず、後の世代に語り継ごう。主への賛美、主の御力を、主が成し遂げられた驚くべき御業を」。民がどんなに背いても、なお憐れみ深く、罪を贖ってくださる神さまの驚くべき救いの御業を、讚美しつつ語り継ごうという呼びかけですが、これこそ十字架の福音を与えられた私たちが歌うべき讚美ではないでしょうか。

こんな私でも憐れみ深く罪を贖ってくださったという恵みに包まれて、罪を悔い改めつつ、神さまに信頼して従っていく人生を進んでいくのです。罪の赦を自覚する者は謙虚にされます。謙虚さは差別意識から私たちを解放してくれます。どんな人とも兄弟姉妹として、共に生きていける者にしてくれます。

7節をご一緒に読みましょう。「子らが神に信頼をおき、神の御業を決して忘れず、その戒めを守るために」。全能者にして慈愛の神さまに全幅の信頼をおき、神さまのなされた御業を一つ一つ決して忘れず、その戒めを守って生きて行くことこそが、幸いなのです。私たちが子や孫たちに遺していくのは、この信仰です。この信仰をこそ、子や孫たちに遺していきたいものです。

祈ります：

神さま、今日は、私たち日本が 100 年前に、韓国・朝鮮を植民地支配し始めた記念の日に当ります。この日に詩編 78 編を読めと備えて下さった貴方の恵みを感謝します。あらためてイスラエルの民は偉いなと思いました。自分たちの先祖の底知れない罪深さをはっきりと認めて、子や孫に語り伝えなければと歌っています。

私たちを、心から悔い改める者にして下さい。私たち日本人を変えて下さい。もっと謙虚にして下さい。そしてこのような者をも赦し、生かして下さっている貴方に深い感謝と信頼をよせて、その御心に従って生きる信仰を、子や孫たちに伝えていくことができますように、私たちをお導き下さい。

私たちの子や孫たちが、朝鮮半島や中国の方々、アジア、世界の方々と平等な立場で互いに仕え合い、平和を作り出し、共に生きる喜びを持つことが出来る者にして下さい。

このお祈りをイエスさまのお名前によってお捧げします。アーメン